年1回以上はやっていたのに，それ以後の3年間は全く山登りをしていなかった。これでは心身ともに老化するはずだというのがいつわりのない結論。今後はどうするか，自分としては可能な限りチャンスをとらえて，毎年1回は1,000～2,000m程度の登行をつづけたい。息子も高校生になったのだし，一緒に登る折もあるだろう。少くとも登りだけはまだ負けないつもりでいる。

山の調査と車道

式　正英

昨年の夏から秋にかけて新潟県清津川流域の地形調査に3回足を運んだ。山地の調査は昭和31年に終えた早川流域（赤石山地）以来10年間の空白があった。登山は学生時代から始め，その後は仕事にかこつけて毎年連続してきていたが，調査の対象が低地に移ると共に，山らしい所を歩くことから遠ざかっていた。久しぶりの山旅は，自らの体力が衰え，交通路線の開発に伴う山地景観の変化が著しいことを思い知らせた。

清津川へは群馬県月夜野から三国峠を経てはいるのが近い。三国峠に車道が通じたのが6年前，舗装が完成したのが2年前である。峠から降って浅貝の宿に至ると前面が豁然と開けて苗場国際スキー場の大舞台があらわれる。道路はその先，浅貝川の右岸山腹を斜めに登って火打峠に至るが，この付近，谷床の緑の平地とその間に縫いこまれた白く光る網状の水流，筍山下部の緩やかな山腹と豪雪地帯特有の濃緑，斜面下部の崖錐の整列，それ等が組合わさって野性的，近代的な美景を呈している。これが最近カレンダー写真でみたおそらくチロル，アルプスであろうズーデン峠の風景とひどく似ているのだ。アルプスのは氷蝕谷，清津川上流は裂罅谷起源の縦谷と成因の差はあるものの，近代的車道を配した山腹と幅広い谷床，それに展望の角度の偶然的一致が類似性の原因になっていると思われる。

早川上流の野呂川流域でも昭和30年頃夜叉神峠をトンネルが抜け，その後広河原に達した野呂川林道と，一方西山温泉から蝮平，更に上流にのびた電源開発道路とが接続（昭和36年頃）して，座したままで，鷲住山などの比高1,000m以上の長大な急斜面をほしいままにすることができるようになった。蝮平や広河原に達するまででも，つい此の間までは歩き始めてから優にまる1日を要した。それも登るほど頂稜が退いていくように錯覚される南ア独特の急斜面にふりまわされた挙句のことである。その様な時の自然は圧しつぶさんばかりの威迫を示すものであるが，車窓からのぞむ自然は同じ巨大さでもすでに整頓された立たずまいである。人間が自然の懐ろにわけいってその神秘のヴェールをはいだ結果は，馴らされた形の中におさまってしまう。風光は車道によって開発されるが，自然の粗野は優美へと変わるようである。

体力の衰えの方は，これ亦余りにも歴然としていた。清津川上流の赤湯への道を辿ったときのこと，棒沢の出合いをすぎて谷壁が急になるため登路は鷹の巣峠へと長い急な捲き道となる。同行の大学院諸君の若い脚力には及ばず，ロックハンマーで岩石をたたいては時を稼いだこと再三であった。登攀に弱くなったのは息切れの所為で，鈍った体を何とかせねば，ついには山から突き離されるぞと，自ら肝に深く銘じた次第である。前山は容易に車で越えられるようになったのだから，齢を重ねても，深山の主部を調査に歩くことは将来ますます有望である。これこそ近代的道路の与えてくれる最大の恩恵だとひそかに思っている。

お茶大の環境変化と災害

正　井　泰　夫

お茶の水女子大学に勤め始めてから満3年たった。その間，ちょうど一般の都市が示す変化や災害と同じような環境変化や災害を身をもって体験してきた。お茶大の変化は，ちょうど都市化の進展と似ている。緑の木立を切りたおして住宅や工場やビルが建つのと同じように，地理学教室のすぐ周りでもビルブームが続いている。講堂裏のひなびた庭には古めかしい渡り廊下や灌木をとり払って，クリーム色の中層ビル四階が建ち，家政学部が研究や教育に使用している。このビルを建設している途中，失火により僕の研究室は大きな損害を受けた。つまり，煙と火の子と水により，沢山の研究資料が損失したり，よごれたりした。そして何日もの間，研究室の使用が不可能となった。これは全く，隣りの家から火がでて，そのために生活を大きく乱される都市の火災と同じことであった。

現在，僕の研究室の窓のすぐ外側では，人がはげしく行き来している。新築なった理学部の高層ビル（6階，エレベーター付き）に机や椅子を運び込むためである。お茶大の高層化といえば聞こえがよいが，このおかげで緑の木立が大量に減り，窓のすぐ外側には，何本かのイチョウが，いつ切られるかとおびえながら立っている。正面の1本はもう6月だというのに，緑の芽がほんの少し出ただけで，この分だと遠からず枯れるだろう。これは大気汚染のせいかどうだか分らないが，それにしても石ばかりの環境になりつつある。この新築工事のおかげで，土ぼこりがものすごく，風の吹く日は，いくらむし暑くても窓が開けられない。廊下側のドアも，うっかり開けると土ぼこりの入口となってしまう。理学部関係の人に相談したら，その後，水をまいてくれるが，効果はきわめて不十分である。それに，これから真夏をひかえて，このガラスの多い巨大なビルの照り返しがどのくらいあるだろうかと，今からひやひや，いや，汗がじっとりとにじみ出る思いである。

部屋の二方は交通人口が余程少ない時に考案したと思われる，足音のよく立つ廊下で囲まれてい